

ひとり

今年のサッカー、ワールドカップ、ドイツ大会も終わりました。日本は健闘虚しく、残念な結果でありました。ところで、いつも気になるところですが、応援風景が最近が変わって来たように思えます。現地のスタジアムでの応援ならわかるのですが、スポーツ居酒屋やら、又あちこちにありますスタジアムの大きなオーロラビジョンでの応援が以前には無かったと思えます。しかも大勢の観客が入ると言うので驚きます。何か「古い人間」と言われそうですが、あまりそのようなことは経験したことがないので、今時というのでしょうか……

多くの人々と共有する応援の楽しさがあるのではあるのでしょうか。そのことに異論をはさむことはないのですが、何かこのような応援風景ばかりでなく、世の中全般が、「みんなと一緒に」という意識が強すぎるように思えるのです。以前「赤信号みんなでわたればこわくない」という流行言葉がありました。以前よりもこの事は強くなっていっています。しかし所詮人間は孤独な存在です。「無量寿経」に「人在世間愛欲之中。独生、独死、独去、独来。身自当之、無有代者」(人、世間の愛欲の中にありて、ひとり生まれ、ひとり死し、ひとり去り、ひとり来る。身みずからこれを受け、代わる者あることなし。)という一節がありますが、まさにわたし達はそれがこの世にたった一人で生まれ、またたった一人で去っていかなければならない存在です。この孤独、ひとりぼっちというところに耐える力が不足しているように思えるのです。

携帯電話をいつも手放せない、アルコール依存、パチンコ依存、孤独が辛いのだと思います。「あの人が言ったから」とか、「みんながしていることだから」とか、責任を「みんな」にかぶせることも多いですね。そんなことです。何かがあっても責任の取り方がおかしくなってきたり、人間は孤独な存在というのが仏教の見方でもあります。先人の遅しさは誰もがこの孤独に耐える強さを秘めていた事です。釈尊も、親鸞聖人も、芭蕉も、種田山頭火も、兼好法師も、誰もが孤独との背中合わせに生きられています。逆に孤独を耐えるというより、その孤独こそが自らを磨き上げる場として考えられているのだと思います。孤独は辛いことでしょうか。悲しいことでしょうか。「孤独死」などといいますが、やりきれない思いにおそわれます。「ひとり」という恐怖は、誰しも容易に想像できるでしょう。しかし先哲はよく敢えて「世捨て人」として、自らを鍛え上げていきました。それは、自己を観る最も尊い時間であったのでしよう。人は集団的な生き方をすれば「孤独」の苦しさからは逃れられるかもしれませんが。しかしその中に埋没すればするほど「孤独」は恐ろしくなります。「プチうつ」になったり「落ち込み」が激しくなったり、「みんなと合わせる」生き方が楽に見えてきます。しかし約束します。そのような生き方は、何ら「孤独」の解決にはならないことを……いやもつとひとりになった時には孤独感が増すことを……「ひとり」を友として生きていく覚悟が求められています。そんな中でも、どんなときにも見捨てずに、呼びかけの阿弥陀様の「どんなに世間が冷たかろうが、どんなに他人から相手にされまいが、私だけは決して離さずが見捨てずにはおかない」と、呼びかけられる大きな慈悲心に、気付けられるのが「南無阿弥陀仏」であります。孤独であって孤独でない世界を逞しく歩めたらと思います。